

校長ニューズレター(第18号・9月) 宜野湾市立長田小学校校長:横山芳春



ミャンマーの味

今夏は、ミャンマーに行ってきました。格安航空券を見つけて、那覇から福岡へ、福岡からバンコク経由でヤンゴン（ミャンマーの首都）に到着です。

本校の先生たちに、夏休みにはぜひ旅をしてくださいとすすめていました。というのは、旅をするとひとは“十歳若返る”といわれるほど、旅はわたしたちをリフレッシュさせてくれます。旅は、教師にとって必要な見識も深めてくれます。

この夏、ベトナムに2人、イタリアに2人、ドイツに1人とわたしをふくめて6人の職員が海外旅行をしました。エネルギーをいっぱい得てみなさん帰国しました。

さて、ミャンマーのはなしにもどりましょう。旅の楽しさの一つに、「食事」があります。東南アジアは食の宝庫で、タイやベトナム料理は世界的な名声があります。両国の料理におおいに満足しているわたしは、当然、それらの近隣国であるミャンマー料理への期待も相当なものでした。

夜間にヤンゴンに到着したため、最初の食事はつぎの日の朝食（ホテル）でした。モヒンガーというスープ麺がごく普通の朝食なので、まずはこれを食した。この麺は日本のそうめんそっくりで、これをお椀にいれて魚でとったスープをかける。そのうえに、ゆで卵のスライスや、魚のすり身の揚げ物、ライム、唐辛子、ラー油、魚しょう油を好みでかけます。わたしは、辛党なのでとうがらしをたくさん入れました。

その結果、なにやらドロドロとしものになり、あまりおいしくなかった。おまけに、唐辛子をいれすぎでその日はお腹がゆるみっぱなし。

ベトナムのフォーやタイのそばは、香ばしいニ

ンニクの香りがする、スープも透き通ったサッパリ味。大好きなのだ。だから、ミャンマーのモヒンガーに相当な期待をしていた。それで少々裏切られた感じがした。

そのご、いろいろとミャンマー料理を試してみた。ミャンマー料理の特色は、「油もどし煮」という調理法。外国人に「カレー」と呼ばれている。このカレーは、たまねぎをスパイスと炒めたものに、具をくわえて煮込み、水分を蒸発させて具の表面が油でおおわれるように仕上げるもの。具は、ポークやビーフ、魚やエビなど。

インドカレーに作り方がなっていますが、味はインドカレーから香辛料をとりのぞいた感じ。インドカレーやタイカレーの大好きなわたしには、ミャンマーカレーはインパクトが弱くてイマイチ。味があまりないのです。

このままではいけないと思い、ヤンゴンでレストランを探すのだが、この首都にレストランらしきものがないのである（食堂や屋台はあります）。オドロキである。

このままの印象ではミャンマー国民に申し訳ないと思い、「世界の食文化④ ベトナム・カンボジア・ラオス・ミャンマー」（農文協）を読んでみた。分かったことをつぎに紹介しよう。

- ①大量に米を食べる。
- ②その米を食べるために食欲増進剤として、おかずがある。
- ③エビの塩からペーストでつくった「ふりかけ」あり。辛さとうま味の具合が良く、これでご飯が何杯も食べられる。
- ④「油もどし煮」はほかの東南アジアにはあまりない。

⑤使う香辛料が非常に少ない。

⑥魚しょう油をよく使う。

そういえば、食堂で「エビのカレー」と「マナガツオのカレー」を注文すると、盛りだくさんのサラダとともに、いろいろなふりかけ（塩から）がついていた。ミャンマーの人たちは、このふりかけをご飯につけて食べているのだ（ふりかけだが、ペースト状であり、ふりかけられない）。

わたしが物足りないと感じた味は、このふりかけをうまく配合して食べていなかったからだ。

レストランが町中に見当たらなかったのは、手持ちの観光案内書によるところである。

「かつてビルマ人には仏教思想から、食べ物は人に振る舞うもので、お金で売るものではないという観念があって、零細な屋台のモヒンガー屋などは別として、ビルマ料理店はほとんどなかった。」

「世界の食文化④」によると東南アジアでは、自国料理のレストランの普及はさほどみられなかったそうである。お金持ちは自宅に料理人がいるのが普通で、自国料理は自宅で食べるのという意識が強かったようだ。外食といえば、洋食が中華料理が一般的だった。ミャンマーの場合は、中華かインド料理となる。

ところが別格がベトナム。ベトナム戦争終結後、難民が欧米でおおく生活するようになる。その地でレストランを開き、評価されエスニックブームへ。自国料理への自信ができた。本国では、中産階級が発生し、たまには贅沢な外食をということで、レストランが流行る。

タイはとくに、高級レストランが現在多数ある。

こういった経緯があって、タイやベトナムでは料理が洗練されていくのである（タイでは宮廷料理の発達という背景もある）。カンボジアやラオス、ミャンマーではこれからというところだ。

さて、わたしの疑問もずいぶん解けてきた。帰国後、「ミャンマーはいいところだったなー」としきりに思い起こされる。それは、洗練されず「昔のまま」というところからくるのかもしれない。



上：町の中の屋台 下：たく鉢僧

